

## 新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（結論）

首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010

### Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 5): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009-2010

水野剛也・福田朋実

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

はじめに これまでの要約と本稿のねらい

本論文は、鳩山由紀夫首相の在任期間中（2009年9月16日～2010年6月8日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌第50巻・第1号（2012年12月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、第50巻・第2号（2013年3月）に掲載した中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を、第51巻・第1号（2014年1月）に掲載した後編-1では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を、そして第51巻・第2号（2014年3月）に掲載した後編-2では、『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を質的に分析した。

本号に掲載する結論では、まず紙幅制限のため前号に収め切れなかった「地球防衛家のヒトビト」の分析を完了させた上で、これまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。なお、論文末には付録として鳩山内閣の略年表を添付してある。

#### 1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌第50巻・第1号（前編）に掲載。

#### 2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌第50巻・第1号（前編）に掲載。

### 3 新聞4コマ漫画が描く鳩山首相

- ・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』 (朝刊)
- ・ウチの場合は (森下裕美) 『毎日新聞』 (夕刊) 本誌第50巻・第2号 (中編) に掲載。
- ・コボちゃん (植田まさし) 『読売新聞』 (朝刊)
  
- ・ののちゃん (いしいひさいち) 『朝日新聞』 (朝刊) 本誌第51巻・第1号 (後編-1) に掲載。
  
- ・地球防衛家のヒトビト (しりあがり寿) 『朝日新聞』 (夕刊) 本誌第51巻・第2号 (後編-2) に掲載。以下は、そのつづき。

#### ・地球防衛家のヒトビト (しりあがり寿) 『朝日新聞』 (夕刊)

鳩山を示すシンボル (画像・文字・画像と文字) に目を転じると、11本中9本で画像が使用されており (画像のみ=6本、併用=3本)、つまり似顔絵で描かれることが多かったが、過去の首相と比べて突出して多いとまではいえず、特別視するほど偏りがあるわけではない。

ただし、漫画という表現形態を考えれば当然ともいえるが、作者はできるだけ似顔絵で首相を描こうと考えており、そのために全体として画像の使用が多くなっているのかもしれない。安倍 (第1次、以下略) が突然に辞意を表明した直後、しりあがり寿は作品中 (2007年9月15日号) に自身とおぼしき「某漫画家」を登場させ、次は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と語らせているからである。「地球防衛家のヒトビト」のシンボル使用を首相別にまとめた表13を見ても、全体では画像のみ (32本) が文字のみ (21本) を上回っている。本論文の中編で指摘したように、「アサッテ君」 (『毎日新聞』朝刊) でも画像が多用されている (画像のみ=5本、文字のみ=1本、併用=1本、本論文中編・表11参照) ことを思い起こせば、鳩山の容貌は少なくとも「描きにくい」ものではなかったといえそうだ。<sup>58</sup>

表13 「地球防衛家のヒトビト」のシンボル使用 (首相別)

|    | 画像のみ | 文字のみ | 画像と文字 (併用) |
|----|------|------|------------|
| 小泉 | 16本  | 14本  | 11本        |
| 安倍 | 4本   | 1本   | 6本         |
| 福田 | 2本   | 1本   | 5本         |
| 麻生 | 4本   | 3本   | 7本         |
| 鳩山 | 6本   | 2本   | 3本         |
| 合計 | 32本  | 21本  | 32本        |

とはいえ、けっして文字の使用が少ないわけではない。とくに「地球防衛家のヒトビト」では、登場人物は実に饒舌に首相について語っている。鳩山を描いた11本中でも半数近い5本 (文字のみ=2

本、併用＝3本）で文字が使われている。先行研究も指摘しているように、4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくいいため文字により説明的に首相を描く必要性が高まる、という考え方も依然として説得力を保持している。いずれにせよ、本論文の前編でも指摘したように、新聞4コマ漫画のシンボル使用については未知の部分がおお多く、今後もさらなる研究で分析を深める必要がある。

これまでの分析から、もともと他の漫画よりも圧倒的に多く首相を描いていた「地球防衛家のヒトビト」は、鳩山の在任期間中にはよりいっそう積極的に、かつ旺盛な時事性・風刺性をもって首相を描いており、その描き方も多様で独自性に富むことがわかった。先行研究が示した首相描写のパターンわけには十分な妥当性があることも確認できた。しかも、「地球防衛家のヒトビト」は前任の麻生政権中にすでに5本の作品で鳩山を登場させており、その点でも突出した積極性を見せていた。つまり、就任以前からこの政治家に注目し、首相就任後もひきつづき、あるいはよりいっそう活発に描くようになっていたのである。首相になる以前から、そしてそれ以後も、「地球防衛家のヒトビト」において鳩山はつねに「描かれやすい」政治家だったわけである。

また、先行研究が特徴づけているように、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事的4コマ漫画であることも、本論文であらためて確かめることができた。ナレーションを使っていると読める作品（図21）や「カエル」が登場する作品（図23）、そして在任期間「外」ではあるが明らかにナレーションを用いている作品（図22）が例証しているように、政治批評・風刺を積極的に展開し、かつ作者自身の見解を比較的にはっきりと示しているからである。これは「地球防衛家のヒトビト」だけに見られる独自性である。登場人物が実に饒舌に首相を批評・風刺することや、1コマの政治風刺漫画のように架空の首相を滑稽に描く作品が多いことも、「自己主張型」の特徴を補強している。

最後に、現職ばかりか歴代や後任の「首相」まで登場させ彼らを果敢に風刺・批判している点、そして「自己主張型」としての特徴が顕著であるという点で、「地球防衛家のヒトビト」はジャーナリズムの権力監視・番犬機能を意識的に発揮しようとする4コマ漫画だといえる。先行研究も指摘しているように、作者のしりあがり自身もそのことを認めている。たとえば、2004年の『朝日新聞』のインタビューで彼は、「もう少しマシな世の中になくちゃって、今、みんな考えてるんじゃないか。気持ち的には、正義の味方のマフラーを巻いてる。でも、どうしたらいいかわからない。そういうヒトビトの代表のつもり、かな」と語っている。その4年後に出版したエッセー集でも、「自分の笑いは『覚醒』」、つまり権威や権力を引きずり降ろすような「プラスの価値をリセットする」諧諷であると書いている。作者は同じエッセー集で、「新聞に載る四コママンガやちょっとした時事ネタのカットを描くとき、それぞれの事件に対する『人並み』の反応を探す」とも書いているが、この姿勢は一般庶民に代わり権力者の言動に目を光らせる、つまり原初的なジャーナリズムの権力監視・番犬機能に通じるものだと見える。<sup>59</sup>

#### 4 結論 分析・知見の総括

本項では、先行研究と比較しながらこれまでの分析から得た知見を総括し、今後の課題などを提示

し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能、政治的コミュニケーション機能について若干の理論的考察を加える。

まず、本論文の前編で全体像を把握するために量的な側面を分析したところ、特筆すべき知見として以下のような諸点を見いだすことができた。これらは、先行研究が示している知見と根本的な部分において重複するが、鳩山の在任期間中にとくに顕著に見られた特徴もある。冒頭の「\*」は先行研究と重複する点、「†」は鳩山の事例に特有な点、あるいは本論文で新たに得られた知見であることを意味する。

\* 首相を描く漫画と描かない漫画とのへだたりは、依然としてかなり大きい。鳩山を描いた作品の圧倒的多数(19本中18本)は「アサッテ君」(『毎日新聞』朝刊=7本)と「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊=11本)で占められ、それら以外では「ののちゃん」(『朝日新聞』朝刊)の1本しかない。先行研究が見いだした「時事的4コマ漫画」と「家庭的4コマ漫画」の間にある大きな差異は、歴史的といえる総選挙による政権交代が実現したのちも、いささかも縮まっていなかった。

† ただし、わずか1本ではあれ、「ののちゃん」が首相を描いた事実は、それだけで注目に値する。それ以前は2005年9月12日号の作品(番外作品)で小泉を描いたのが最後で、実に4年7ヵ月ぶりのことである。もちろん、だからといって「ののちゃん」を含む家庭的4コマ漫画が、他の首相と比較して鳩山をとくに頻繁に描いたわけではない。

† 頻度を基準にすると、小泉・安倍・福田・麻生の4人をしのぎ、鳩山はもっとも「描かれやすい」首相である。高い順に並べると、鳩山(1.73%)>麻生(1.38%)>安倍(1.26%)>小泉(0.83%)>福田(0.67%)、となる。これは、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」がそれぞれ鳩山をもっとも頻繁に描いたことを意味している。いずれも現実社会の動きを積極的に作品に取り入れる時事的4コマ漫画であることから、政権交代という希有な政治的変革が首相の登場頻度を高めたと考えられる。

\* 新聞別では『朝日新聞』>『毎日新聞』>『読売新聞』の順で頻度が高く(『読売新聞』は0%)、朝刊よりも夕刊の漫画がより頻繁に首相を描いている。ただし、首相を描く漫画と描かない漫画との差が大きいだけに、その解釈には慎重にならざるをえない。

† 内閣支持率が低下・低迷しつづける一方で、鳩山は在任期間を通じて比較的まんべんなく描かれているが、この特徴は過去の首相では麻生にもっとも近い。あえて大まかに分類すれば、どちらかといえば「前半型」の小泉に対し、安倍と福田は明らかに「後半型」、そして麻生と鳩山は起伏の少ない「安定分散型」と特徴づけられる。鳩山の「描かれやすさ」の背景として、在任期間を通じて極端な偏りなく、平均的・継続的に描かれている点を理解しておく必要がある。

† 鳩山の「描かれやすさ」を本質的に説明づける有力な要因として、政権交代とともに、内閣支持率に代表される社会的評価の低下する度合、つまり「落差」の大きさが考えられる。鳩山は、

71%という高支持率（内閣発足時の支持率としては小泉に次ぐ歴代2位）で好調な船出をしながら、わずか8ヵ月あまりのうちに、最後は20%を切るまで大幅に沈んでしまった。支持率の大きな「落差」に反映される社会的評価の竜頭蛇尾ぶりこそが鳩山の「描かれやすさ」の本質であったと考えられる。

- \* 上述の知見は、先行研究が示した仮説——首相が描かれる多寡に影響を与えるのは支持率の数字そのものよりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである——とも矛盾しない。支持率の高さ・低さそれ自体ではなく、劇的な登場とその後の急降下、その締めくくりとしてのあっけない幕切れという一連の流れが社会的議論を喚起し、かつマス・メディアでも大きく報道され、社会的評価の「落差」や政権交代に対する評価を含めたそれらの総体が「描かれやすさ」につながったと考えられるからである。
- \* しかし、先行研究が提示した仮説は時事的な「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」にはうまくあてはまっても、他の家庭的な漫画とは必ずしも同程度に適合しない。この点を含め、首相の「描かれやすさ」と内閣支持率や社会的注目度との関係の理論化は、将来に残された重要な研究課題である。
- † 鳩山を描いた作品では画像が多用されており、この意味でも文字どおり「描かれやすい」首相であった。しかし、かといって文字の使用が極端に少ないとはいえ、新聞4コマ漫画のシンボル使用についても、より蓋然性の高い知見を得るには追加的な研究を要する。

中編・後編-1・後編-2でおこなった質的な分析では各4コマ漫画の首相描写の特徴を明らかにしたが、全体を総括すると、以下に示すような共通点や傾向、あるいは特徴を見いだすことができた。量的な分析と同じく、冒頭の「\*」は先行研究とほぼ同一の点、「†」は鳩山の事例に特有な点、あるいは本論文で新たに得られた知見であることを意味する。

- \* 首相が登場する作品でも、ほとんどの場合、作中の中心的役割は主要登場人物など無名の一般庶民がになる。1コマの政治風刺漫画とは異なり、首相が主人公として単独で描かれる作品はきわめて少ない。なお、鳩山の在任期間中、首相を描いた作品中に主人公一家がまったく登場しない事例は「アサッテ君」の1本（本論文中編・図7）、「ののちゃん」の1本（本論文後編-1・図11）、「地球防衛家のヒトビト」の1本（図23）であった。
- † 歴代の首相に比べ、鳩山を描いた作品には現実としてあった首相の言動を題材とするものが目立つ。鳩山の発言や行動がそのまま漫画の題材にできるほど社会で注目を浴び、かつ批評・風刺しやすいものであったと考えられる。
- \* ただし、現実にはありえない架空の状況設定で首相を揶揄する作品も一定数あり、この点では1コマ漫画との類似性が見られる。
- \* 首相はしばしば新聞やテレビなどマス・メディアの報道対象として描かれ、登場人物はそれを

通して首相を見知り・語る。この構図は、鳩山を描いた19本中、少なくとも7本で見られた。

- \* 首相に対する風刺・批判は、ほとんどの場合、登場人物を通して語られる。
- \* 首相を賛美・称賛するような作品は皆無である。
- † 福田・麻生にひきつづき、鳩山を描いた作品には批評性・風刺性の濃い作品が目立つ。この理由として、前述したように、政権交代を達成し華々しく登場したものの短期間で看板倒れのように退陣したこと、つまり社会的評価の「落差」が大きかったことが考えられる。
- \* 新聞4コマ漫画にもジャーナリズムの権力監視・番犬機能をにうものがある。
- \* いくつかの作品は、4コマ漫画の首相描写を十全に理解する上で、当該首相の在任期間中だけでなく、より長い時間枠のなかで連続的な流れを把握する必要があることを示している。

上述の諸点とは別に、本論文の知見は、家庭的4コマ漫画の首相描写に関して先行研究が提示した仮説にもいくつかの論点を提示する。その仮説は、家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定される」、というものである。

まず、「純家庭的漫画」である「ウチの場合は」（『毎日新聞』夕刊）と「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）で首相を描いた作品が皆無だったことはけっして不自然ではないが、小泉以降、鳩山がもっとも「描かれやすい」首相であったという点にかんがみて、仮説の蓋然性を見定めるためには今後も作品を注視しつづける必要がある。なぜならば、総選挙で自民党から政権を奪取しながらあっけなく辞任した鳩山こそ、社会的注目を集めたという意味で、上の2つの家庭漫画で描かれてもおかしくはなかったからである。それどころか、鳩山政権時の「ウチの場合は」と「コボちゃん」（母の早苗が妊娠したという事情があったにせよ）は、以前よりもさらに政治性を希薄化させていたとさえいえる。首相を描いた作品がないため仮説がただちに揺らぐわけではないが、家庭的4コマ漫画の首相描写についてより体系的・安定的な知見を得るためには、なおも継続的な研究が欠かせない。

次に、4年7ヵ月ぶりに「ののちゃん」（『朝日新聞』朝刊）で首相が描かれたことは確かに重要な出来事であり、かつ先行研究の仮説がある程度は補強するが、同時に「ののちゃん」の首相描写について解明すべき課題がより深まったことも事実である。普段の「ののちゃん」は「意図的に政治問題を避け、あえて家庭的な漫画に徹している」と考えられるが、いかなる場合にその方針から逸脱して首相を描くのかは、本論文で得た知見だけでは推測することすら難しい。上述した家庭的4コマ漫画の首相描写に関する仮説とは別に、この点も後続の研究で検討されるべき課題である。

次に、先行研究が示した新聞4コマ漫画のタイプわけについても、上述の知見をふまえて若干の考察を加える。先行研究は、首相描写の頻度や方法を基準に、新聞4コマ漫画を以下の4タイプに大別している。

- ・純家庭的4コマ漫画 家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わないタイプで、

「ウチの場合は」と「コボちゃん」がこれにあたる。

- ・家庭的4コマ漫画 基本的に上のタイプと同じであるが、ごくまれに政治家や政治問題を扱い、かつ鋭い批評・風刺をすることもあるタイプで、「ののちゃん」がこれにあたる。
- ・時事的4コマ漫画（世論反映型）政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱うが、作者自身の政治的見解やメッセージをぶつけるというよりは、もっぱら庶民の間で共有されているであろう社会の一般認識や感情を反映するタイプで、「アサッテ君」がこれにあたる。
- ・時事的4コマ漫画（自己主張型）政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱い、かつ作者自身の政治的見解やメッセージを比較的是っきりと表現するタイプで、「地球防衛家のヒトビト」がこれにあたる。

なお、それぞれのタイプは互いに完全に排他的ではない。

まず、もっとも重要な点として、鳩山の在任期間中の作品を見る限り、上述のタイプわけを変更・修正する必要性はまったく認められない。「ウチの場合は」と「コボちゃん」は首相を1度も描いていないため、「純家庭的4コマ漫画」のままでよい。同じく「ののちゃん」も、長い潜伏期間を経て首相を描き、かつ時事漫画のように鋭い批評性・風刺性を発揮していることから、作者のいしい自身が「あいかわらずです」とのべているように、「家庭的4コマ漫画」と独立して位置づけるべきである。「アサッテ君」では過去の首相と比べ批評性・風刺性の強い作品が目立ったが、急速に人気を失っていく首相に対する一般的な市民感情を反映した結果だと考えられるため、「世論反映型」という分類がふさわしい。「地球防衛家のヒトビト」も、作者自身のナレーションに似た手法を使っている作品が複数あったことが示すように、ひきつづき「自己主張型」らしい独自の特徴をもちつづけている。

とはいえ、本論文を含め現存する事例研究だけで類型化を確定できるわけではない。とくに家庭漫画の首相描写については未知の部分が依然として多い。時事漫画でも「アサッテ君」は「世論反映型」であるだけに、政治に対する社会全体の認識や評価にあわせてこれまでにない描き方を見せる可能性は十分にある。今後も同じ方法で分析を積みあげることで、新聞4コマ漫画による首相描写の理論化・体系化をよりいっそうすすめる必要がある。さしあたり、鳩山の後任の菅直人と野田佳彦、彼ら民主党から政権を奪い返した自民党の安倍晋三（第2次）、さらに安倍の後継者に関する事例研究は、政権交代が及ぼした影響や変化を見きわめるためにも優先順位の高い課題である。もちろん、先行研究が存在しない小泉以前の首相の描かれ方を分析することによっても、有用な比較材料を得ることができるはずである。いずれにせよ、先行研究が扱っていない首相については、分析結果がまとまり次第、本誌で順次発表していく予定である。

最後に、新聞4コマ漫画とジャーナリズムの権力監視・番犬機能の関係、および政治的コミュニケーションとしての理論的位置づけについて若干の考察を提示して、本論文を締めくくる。

まず、過去の首相に比べいくら鳩山が「描かれやすい」首相であるとしても、3大全国紙の4コマ漫画全体を俯瞰すれば、首相を描いた作品はわずか1.73%（1,097本中19本）にすぎず、しかも3つ

の家庭漫画では唯一「ののちゃん」が1度描いただけという事実は、努めて冷静に受けとめておく必要がある。でないと、首相を描いた一部の漫画・作品ばかりに目を奪われ、実態からかけ離れた過大な評価を下してしまいかねない。

しかし、かといって新聞4コマ漫画がジャーナリズムの権力監視機能と無関係かという、けっしてそうではない。鳩山は、長くつづいた自民政権を総選挙で倒し、いわば民意の反映として首相に就任した。このことは、最初期の内閣支持率が70%を超えていたことからわかる。にもかかわらず、不評だった前任者の麻生よりもさらに短期間で、人々の期待を大きく裏切る形で最高権力者の地位から退いてしまった。内閣支持率の落ち幅は、小泉以降のどの政権よりも大きかった。そんな鳩山を前任の首相の誰よりも頻繁に、かつ批判的に描いている事実は、たとえ作品の圧倒的多数が「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」で占められるにせよ、新聞4コマ漫画が一般的に思われている以上にきびしく国の指導者の言動に目を光らせていることを物語っている。新聞4コマ漫画はけっして単純で無色透明な娯楽ではなく、現実の社会や政治問題をある程度反映した新聞報道の一部なのである。

しかも、その視点・観点には、他の報道形態（1コマの政治風刺漫画も含む）には見られぬ独自性がある。その意味では、新聞の他の要素が照射できていない盲点の一部を4コマ漫画が埋めているといえる。

1つとして、子供を含む無名の一般庶民が作品の主役であり、彼らの目や口を借りる形で作者が首相を描いている点は新聞4コマ漫画ならではの特徴である。つまり、政治的な力をもたないごく普通の市民を代表して権力者の言動を監視・批評しているといえ、これこそ原初的なジャーナリズムの番犬機能に通じるといえなくもない。

さらに、市井の市民がマス・メディアに報道される首相を見知る・語る、という構図が多用されていることも刮目に値する。新聞というマス・メディアの内部にありながら、新聞を含むマス・メディアを相対化・客体化し、読者により近い立場で首相を批評・風刺していると考えられるからである。権力者を監視すべきマス・メディア自体が権力化しているという批判がなされる今日、マス・メディアと読者を橋わたしするような4コマ漫画の視座は貴重である。先行研究が指摘しているように、新聞をはじめとするマス・メディアが人々と現実社会をつなぐ「窓」だとすれば、新聞4コマ漫画はマス・メディアそれ自体と人々とをつなぐ「窓のなかにある小さな窓」のような存在だといえる。

上述のような特性をもつ新聞4コマ漫画は、政治的コミュニケーション学の概念に依拠すれば、「トリックスター」（いたづら者・道化）になぞらえることもできるかもしれない。日本のマス・メディアと政治の関係を他国のそれと比較検討したスーザン・J・ファー（Susan J. Pharr）によれば、こと政治報道において日本のマス・メディアは「トリックスター」として特徴づけられるという。それは、ある特定の勢力に束縛・支配されることなく、インサイダーとアウトサイダーの立場を行き来しながら神出鬼没、変幻自在に諧謔的、あるいは冷笑的に社会や権力をとらえる存在を意味する。ファーの指摘が日本の主要なジャーナリズム機関の政治報道にどれほどあてはまるかは別として、無



名の庶民の立場から政治権力者を揶揄する新聞4コマ漫画には、その政治的コミュニケーション機能において多分に「トリックスター」としての特徴を見いだせるかもしれない。<sup>60</sup>

注

58 2007年9月15日号の「地球防衛家のヒトビト」の作品分析は、本論文前編の後注3で示した水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（後編）両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第48巻・第1号（2010年12月）：61～78、でおこなっている。

59 河合真帆「しりあがり寿さん『僕の分身』 連載『地球防衛家のヒトビト』本に」『朝日新聞』2004年6月22日、しりあがり寿『人並みといふこと』（大和書房、2008年）、65、202。

60 Susan J. Pharr, "Media as Trickster in Japan: A Comparative Perspective," in Susan J. Pharr and Ellis S. Krauss, eds., *Media and Politics in Japan* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996), 19-43.

## 鳩山由紀夫内閣の略年表

在任期間 2009年9月16日～2010年6月8日 (266日)

### 2009年 (平成21年)

- 5月16日 小沢一郎の代表辞任にともなう民主党代表選で岡田克也副代表を破り当選。
- 9月16日 第93代首相に指命。内閣発足。
- 9月18日 副大臣および大臣政務官を決定。補正予算に関する閣僚委員会を開催。
- 9月20日 地球温暖化に関する閣僚委員会の初会合。
- 9月22日 国連気候変動サミットで温室効果ガスの削減目標を「1990年比で25%」と表明。
- 9月28日 谷垣禎一が自民党総裁に選出。
- 9月29日 北朝鮮拉致被害者家族と懇談。
- 10月7日 小沢一郎民主党幹事長が党役員人事を決定。
- 10月16日 麻生太郎内閣が組んだ2009年度補正予算 (約14兆7,000億円) のうち約2兆9,000億円の執行見直しを閣議決定。
- 10月20日 郵政民営化の見直しに関する基本方針を閣議決定。日本郵政の西川善文社長が辞任を表明。新社長に斉藤次郎元大蔵事務次官が内定。
- 10月20日 アメリカのロバート・ゲーツ国防長官が来日。沖縄県普天間にあるアメリカ軍飛行場の移設について岡田克也外務大臣と会談。
- 10月26日 臨時国会召集。
- 11月6日 2002～08年の資産報告書・資産補充報告書を訂正。株式28万株など計5億4,500万円相当の記載漏れが発覚。
- 11月11日 「事業仕分け」開始。
- 11月13日 来日したアメリカのバラク・オバマ大統領と普天間飛行場移設問題などについて会談。
- 11月27日 「事業仕分け」が終了。削減目標の3兆円に届かず。
- 12月8日 約7兆2,000億円の追加経済対策を閣議決定。
- 12月15日 普天間のアメリカ軍飛行場の移設問題で日米合意を見直す方針を決定。
- 12月18日 政治資金規制法違反の罪に問われた小沢幹事長の公設第一秘書に対する初公判。
- 12月21日 資金管理団体「友愛政経懇話会」の政治資金収支報告書をめぐる偽装献金問題で、首相側が東京地検特捜部に上申書を提出したことが判明。
- 12月22日 臨時閣議で2010年度の税制改正大綱を決定。「子ども手当」の財源として所得税などの扶養控除を大幅に縮小。タバコ税の引き上げも決定。
- 12月24日 資金管理団体の偽装献金事件で元秘書2人が在宅・略式起訴。
- 12月25日 記者会見で普天間問題の年内決着断念を表明し、「[2010年] 5月末までに新しい移設

先」を決定すると明言。

#### 2009年中の首相（就任前も含む）の主な発言

- ・（沖縄市の集会で米軍飛行場移設問題について）「最低でも県外」の方向で積極的に行動したい。（7月19日）
- ・（6党党首討論会で）一番いいのは海外に移設・移転。最低でも県外移設が期待される。（8月17日）
- ・（首相就任後の記者会見で）官僚依存を脱した政治を実践するための大きな船出だ。（9月16日）
- ・（所信表明演説で）鳩山内閣が取り組むのは「無血の平成維新」だ。（10月26日）
- ・（資産報告書訂正について記者団に）恵まれた家庭に育ったものですから、自分自身の資産管理がきわめてずさんだったことを申し訳なく思う。（11月10日）
- ・（オバマ大統領との会談で）トラスト・ミー（私を信頼してほしい）。（11月13日）
- ・（元秘書の在宅起訴を受けた記者会見で）検察の判断を重く受けとめ、責任を痛感している。国民に深くおわびする。（12月24日）

#### 2010年（平成22年）

- 1月6日 藤井裕久財務大臣が辞任。後任は菅直人副総理・国家戦略担当大臣（兼務）。
- 1月15日 小沢幹事長の資金管理団体の土地購入をめぐり、東京地検が元秘書の石川知裕衆議院議員ら3名を政治資金規制法違反容疑で逮捕。
- 1月17日 阪神・淡路大震災15周年追悼式典に出席。
- 1月29日 国会で施政方針演説。
- 1月24日 沖縄県名護市長選で同市辺野古へのアメリカ軍飛行場の移設に反対する稲嶺進が初当選。
- 1月27日 鹿児島県徳之島へのアメリカ軍飛行場の一部移設案が浮上。徳之島3町長が反対を表明。
- 2月4日 東京地検が石川衆議院議員ら3名を起訴。小沢幹事長は不起訴。
- 2月10日 枝野幸男元民主党政調会長を行政刷新担当大臣に起用。
- 2月17日 アメリカ訪問。オバマ大統領と首脳会談。
- 2月14日 中学3年以下の子供をもつ父母との茶会「リアル鳩カフェ」を開催。
- 3月24日 約92兆円の政府予算が成立。
- 4月27日 検察審査会が小沢幹事長を「起訴相当」と議決。
- 5月4日 就任後初の沖縄県訪問。平和記念公園で献花後、仲井真弘多知事と会談。普天間飛行場の県内移設の意向を表明。
- 5月7日 徳之島3町長に普天間飛行場の機能の受け入れを要請、拒否される。
- 5月17日 口蹄疫対策本部を設置。
- 5月21日 来日したアメリカのヒラリー・クリントン国務長官と会談。東京地検特捜部が小沢幹事長の不起訴を再決定。

- 5月23日 沖縄を再訪問。名護市辺野古への飛行場移設を表明。
- 5月28日 普天間飛行場を辺野古周辺に移設するとの共同声明を日米両政府が発表。この方針を閣議決定。反対した社民党の福島瑞穂消費者担当大臣を罷免。
- 5月30日 社民党が連立政権を離脱。
- 6月1日 口蹄疫問題で宮崎を訪問。東国原英夫知事と会談。
- 6月2日 突然の辞任表明。
- 6月4日 内閣総辞職（ただし、6月8日まで職務執行内閣として存続）。小沢幹事長も辞任。
- 6月4日 民主党代表選で菅直人副総理兼財務大臣が新代表に選出。第94代首相に指名。
- 6月8日 皇居での親任・認証式後、菅内閣が正式に発足。

### 2010年中の首相の主な発言

- ・（元秘書が逮捕された小沢幹事長との会談で）どうぞ戦って下さい。（1月16日）
- ・（参議院予算委員会で普天間問題について）覚悟をもって5月末までに決める。（普天間に）戻ることはしない決意だ。（1月28日）
- ・（誕生日前のパーティーで）正直、政権交代する前のほうが楽だった。名前には「山」がつくが、谷ばかりだ。（2月10日）
- ・（自民・公明党との党首討論で）（自民党政権は）14年かかって辺野古の海にくい1つ打てなかった。私は腹案をもちあわせている。（3月31日）
- ・（自民党の谷垣総裁との党首討論で）（普天間問題の5月末までの決着に）職を賭して頑張ることはいうまでもない。（4月21日）
- ・（記者団に）辺野古の海に立てば、埋め立てられることは自然に対する冒とくだと大変強く感じる。現行案が受け入れられるという話はあってはならない。（4月24日）
- ・（仲井真沖縄県知事との会談で）すべてを県外というのは現実的に難しい。沖縄に負担をお願いしなければならない。（5月4日）
- ・（仲井真知事との会談で）代替地そのものは、名護市辺野古の付近にお願いせざるをえないとの結論にいたった。（5月23日）
- ・（記者会見で）沖縄の基地問題解決に取り組みつけることが自分の使命だ。全面解決へ命がけで取り組む。（5月28日）
- ・（民主党両院議員総会での辞任表明演説で）韓国の済州島のホテルのテラスに一羽のヒヨドリが飛んでまいりました。我が家のヒヨドリが飛んできたと勝手に解釈して、この鳥も「早く自宅に戻ってこいよ」と招いているように感じたところであります。（6月2日）

【Abstract】

## Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 5): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009–2010

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yukio Hatoyama during his tenure, from September 16, 2009 to June 8, 2010.

As the last installment of a five-part series, this article completes the analysis of *Asahi's* “Chikyu Boei Ke no Hitobito” (The Earth-Saver Family), and then it sums up the findings of the entire series and presents conclusions.